

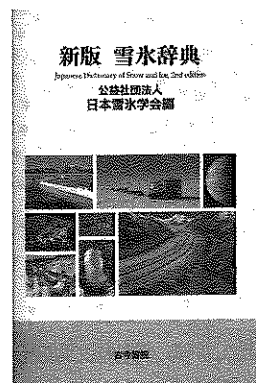
新版 雪氷辞典

公益社団法人 日本雪氷学会編

古今書院

2014年3月15日発行, 315頁, 3,500円

ISBN: 978-4-7722-4173-1



2014年の日本雪氷学会におけるハイライトの1つは、間違いなく、本書「新版 雪氷辞典」が刊行されたことであろう。1990年に日本雪氷学会創立50周年を記念して刊行された「雪氷辞典」の待望の改訂版である。この10年あまりの雪氷研究の急速な発展を鑑みると、内容のアップデートだけでも多大な労力を要するであろうことは想像に難くないが、多数の新たな用語の追加選定が労を惜しまず行われている。結果として、収録された総項目数(1594語)は「雪氷辞典」に比べて何と5割も増加している。このことだけ取り上げても、日本雪氷学会、並びに本書編集委員会の発行にかけける並々ならぬ熱意が伝わってくるだろう。

一般に辞典に求められるポイントは、第一に記述が正確であることである。加えて、知りたい情報へ如何に最短で到達できるか、ということも重要であろう。本書はA5版でページ数は315ということもあり、辞典特有の重厚感は感じられないが、上記二つのポイントは十分に押さえられている。まず、各用語はオーソドックスに五十音順に配置されている。簡潔ではあるものの全般に十分丁寧になされている各用語の説明(大学生以上であれば大部分の内容は理解できると思われる)では、関連する項目への誘導が適宜なされている(参照項目が本文中に出てくる場合はゴシック体で、出てこない場合は末尾に→印で明示されている)。参考文献を明示している用語も散見された。加えて、英和項目対照表が用意されているので、英語等の用語であっても、その意味を容易に調べることが出来る点も有り難い。ちなみに、項目が英語以外の外来語である場合は、ドイツ語、フランス

語、ロシア語、スペイン語、アイスランド語のいずれかであることが示されている。評者が確認した限り、英語以外の外来語は非常に稀であったので、探してみるのも一興であろう。

掲載されている全ての用語は、日本雪氷学会の10の分科会(氷河、極地、凍土、雪崩、物性、衛星・海水、工学、化学、気象・水文、吹雪)対応分野、及び「農林」、「生活その他」分野に割り振られて、各分野の担当編集委員の元で執筆作業が進められたとのことである。延べ186人に及ぶ執筆者の一覧は末尾にリストアップされており、いずれも日本を代表する雪氷研究者の方々であることが分かるだろう。ただ、この一覧表には各執筆者の所属が明記されていなかったもので、その点は残念であると感じた。各用語に関連する研究が、どのような研究機関で行われているのか、というのは有益な情報ではないかと思うからである。また、各用語の選定は、冒頭に記載されている編集方針によれば、「雪氷に直接関係するものを採択し、基礎的な物理学・化学・気象学・海洋学などの用語は、とくに雪氷に関係が深いものを採用」とある。そのため、雪氷学の縁辺に位置する用語の取捨選択にはページ数の制限との関係で大いに悩まれたであろうことは想像に難くない。しかし、(そのためであるかどうかは不明であるが)説明が必要と思われる用語が若干抜け落ちているようにも感じられた。例えば、いくつかの用語の解説で「気候モデル」という用語が使われていたが、これは本書では説明されていない。本書の読者(辞典という性質上、読者は専門家のみでは無いであろう)の多くが気候モデルに精通していると

はあまり考えられないので、本書で説明されないのは若干不親切であると感じた。次回の改訂の際には、掲載用語の選択に読者の意見を反映させるのも1つの手ではないだろうか。

全体としてみると、本書は、雪氷学に関する最新の知見を必要十分に網羅しており、かつ、情報へのアクセスのし易さが丁寧に考慮された良書と言える。また、記述のスタイルは全般に簡潔ではあるものの、各解説では必要なポイントが概ね十分に押さえられている。本稿では若干の不満点を述べたものの、雪氷学に少しでも興味のある全て

の人に対して、本書を書棚に加えることを心からお薦めしたい。このような有意義な辞典を作り上げた「新版 雪氷辞典」編集委員会には心から敬意を表する次第である。個人的には、将来的な本書の電子書籍版刊行を期待したい。本書で有効に活用された参照項目への誘導の利便性は、電子書籍という形態においてよりその輝きを増すはずだからである。

(気象研究所 庭野匡思)
(2014年7月30日受付)